

論文審査結果の要旨

本論文の内容は、公開審査会（平成 27 年 2 月 20 日 13 時から 15 時、於文学部会議室）において説明がなされ、質疑応答が行われた。塚脇論文に対する概評と、審査会で提出された主たる論点は以下の通りである。

概評

カズオ・イングロがこれまで発表した長編 6 作品を単純に眺めた場合、そこに一貫性を見いだすのは決して容易なことではない。最初の 2 作品で日本を舞台にした作品を書いたかと思えば、3 作目では上流階級に仕える執事が主人公といういかにも英国らしい設定の作品を発表し、4 作目ではカフカを思わせるような不条理極まりない難解な作品世界を持つ小説を発表する。5 作目では、それまでの作品の特徴を折衷したような作品を書いて一般読者に妥協したかのようなそぶりを見せたかと思うと、次にはクローンが主人公という安易な SF 小説のような作品を世に送る。一体何を目指し、何を目的にしているのかよく分からず、時に迷走しているようにさえ見える。塚脇論文は、そのようなイングロの作品群を分析するにあたって、イングロ作品を論じる際によく使われる「信用できない語り手」という分析概念に甘んじず、「現実を構成する語り手」という独自の視点を導入しすることによって、6 作品に共通するテーマを見だし、その補助線によって作者の成長・発展の評価までも行おうとする野心的な試みである。とりわけ、「信用できない語り手」という概念を無効にしてしまう不条理小説の *The Unconsoled* や、作者本人が「信用できない語り手」を用いたわけではないと語っている *Never Let Me Go* を「現実構成」というキーワードでイングロ作品の発展過程の中に位置づけた点は本論文の独創性を示すものとして高く評価されて良い。また、本論文は、博士論文であれば当然とはいえ、先行研究に対して十分な目配りをした上で独自の論を築き上げようとする姿勢に貫かれており、その努力の一端は巻末の豊富な引用文献一覧に表れている。さらに、本論文は、流行している文学理論をいたずらに振り回し演繹的な結論を導いたり、抽象的な議論に終始するのではなく、テキストの精緻な読解に基づき実証的な議論を心がけている点も評価されて良い。

審査会で取り上げられた主たる論点

序章

- ・議論のなかで「メタファー」という言葉が数回出てくるが、場所によって違う意味で使われているのではないか。
- ・ここでいう「メタファー」は「寓話性」あるいは「アレゴリー」と言い換えてよいか。
- ・イングロのインタビューを多用しているが、作者本人の発言は全面的に信用して良いのか。
- ・「国際作家」とは「世界文学」を意識した言い方か。

第1章

- ・他人に託して自分のことを語るエツコの行為はそれほど特殊なのか。

第2章

- ・公的責任はなくとも、私的に責任があると思いつくことはあるのではないか。
- ・セツコが予防的措置を取れと言ったか言わなかったかについて、3つの可能性があると言っているが、語り全体が崩壊してしまうとまで言えるのか。語りの一部は否定されるが、語りの「全体」というのは極端ではないのか。第4の選択肢として語りの一部が否定されるという考え方はないのか。
- ・オノが画家としてのキャリアの出発点として父に絵を燃やされたというエピソードを話すが、これが記憶違いで元々実態がないなら「美化」以上のこと、例えば「記憶障害」などという判断にならないか。

第3章

- ・主人公スティーブンスの台詞"I trusted"に関して、選択しないで信じただけということ

は、自分で選択をしなかったということで自分を責めている言葉ではないか。

第4章

- ・主人公のライダーは一流の音楽家（関連して、次章の主人公バンクスは一流の探偵）という前提は語りの中で保たれると考えるのか。

第5章

- ・論文 110 ページにおいて、主人公バンクスの語りが事実通りであったとしても、彼の意識の中で「イギリス人らしくならないと両親がいなくなる」という文言が成立していると考えることができるのではないか。
- ・バンクスが探偵小説の世界観を持っているという点に関して、今の場合最初からホームズの世界と限定をつけないと、概念が広がりすぎて記述の方法として不適切なのではないか。例えば、チェスタトン、クリスティ、チャンドラー、ハメットの世界でも同じことが言えるか。

第6章

- ・クローン達が、何か良くないことが運命として未来に待っていると感じることは、心理的圧迫という点では「心理的問題」と言えるのではないか。その場合 *A Pale View of Hills* や *An Artist of the Floating World* の主人公達に接近することにならないか。

結論

- ・ *The Remains of the Day* の評価が高い理由について補足説明が必要ではないか。

以上のような論点についての質疑応答によって幾つかの今後の課題として検討すべき問題点も明らかになったが、論者からは概ね説得力のある応答が得られ、論者がイシグロの小説の特質に精通していることが明らかになった。概評で述べたような本論文の独創性等も鑑み、本委員会は本論文が博士（文学）の学位を与えるに値するものと認める。